

ベトナム人材の高い能力を引き出す

人材から人財へ、人を育てるには戦略的・計画的な人材育成が欠かせない。

(2021年5月28日開催、日外協「国別派遣前セミナー（ベトナム）」から抜粋)



日外協・国際ビジネスアドバイザー
景山幸郎

戦略的・計画的な人材育成が必須



2001年から約10年半にわたり、黎明期^{れいめい}のベトナムに身を置いた。その間に感じたのは、ベトナムでのビジネス成功の鍵はいかに現地人材を活かすかということである。

東南アジア、特にベトナムへの進出という誰もが最初に思い浮かべるのが競争力のある人件費である。しかし、その人件費競争力と同時に「優秀で勤勉な労働力」も多くの方が思い浮かべるベトナムの特徴であると思う。ベトナムでのビジネス展開のポイントは、単に「競争力のある人件費」に目を奪われることなく、この「優秀で勤勉な労働力」を活かすことだ、と言っても過言ではない。

かつては非常に厳しい経済環境下に置かれていたベトナムも、近年はドイモイ(刷新)政策をきっかけに、急速に発展を遂げている国の1つである。そうした中で、現在の若者は様々なキャリア形成が可能な環境に身を置いているが、雇用する企業側から見ればまだまだ望まれる経験やスキルをもった人材は少ないのが現状ではないか。従って、戦略的・計画的に、この「優秀で勤勉な人材」を真に使える人材に育て上げていくことは必須である。

日本人とベトナム人の違いとは

ベトナムは南北に長い国であり、その歴史からも政治の中心である北部と経済の中心である南部とは気質が違うとも言われている。しかし、個々人に「あなたは幸せですか？」と問う、国の幸福度ランキングにも表れるように、ベトナムの人たちは総じて楽観的であり、「どんなに悪いことがあっても、明日は必ず今日より良くなる」と信じて疑わない愛すべき人たちである。同時に故郷、家族、家庭を大事にするごく普通の人たちであり、その意味では日本人と大きく違う国民性ではないと感じる。ただ、日本の戦後の復興時に多くの日本人が豊かな明日を夢見て頑張ってきたように、多くのベトナム人も豊かな明日を夢見ている。一企業に留まることで夢がかなわないのなら積極的に転職もするという考え方が一般的だ。

異文化を乗り越える

異文化とは育った環境の違いからくる常識の差と言える。ベトナム人と日本人とでは、当然のことながらその育ってきた環境は大きく異なる。時として「日本の常識はベトナムの非常識」や「自分の常識は他人の非常識」といったギャップを経験することになる。人はとかく自分を「正」と考えがちであるが、いったんこれを脇に置き、コミュニケーションを軸とした信